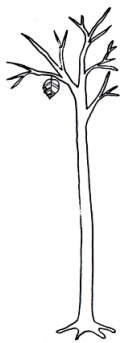


あたりに、冷たい風が  
吹き始め、樹々の葉も  
すっかり落ちて、寒々  
とした風情になりました。

皆様にはお元気におすごしのことと思います。  
夕暮れ時になると、家々の灯りが恋しく  
コートのをりをりをたてて、外出先からひたす  
ら家路を急ぐのも、この時期です。

台所で、コトコトとシチューや鍋物を用  
意して夫や子供が、会社や畑、学校や塾か  
ら帰って来るのを待つ妻や母も、この時期  
はなにか心さびしく、不安な、ものかなし  
い気持ちにさせられます。



秋そして冬は、私達の身のま  
わりでは美しいものが失われ  
命あるものが命ないものによ  
うに、ひっそりと静まり返っていくように

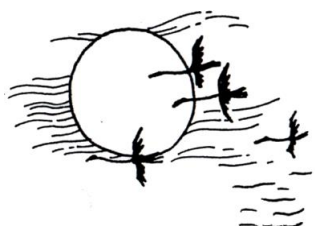
世話になることが多くなったりするなどと  
いうのも、そのよい例でしょう。  
このように私達の身体も例外なく、昨日の  
身体と今日の身体は同じではありません。  
全てのものは、たえず移り変わっている  
のです。けれども、もつとも移り変わりの  
激しいものは、私達の心といえます。十分  
前の心と今の心とは全く違いますし、又  
今の心を十分前の心にもどすこともできま  
せん。心には、ひとときもとどまるという  
ことがないのです。

では、全てのものが、移り変わるとすれ  
ば、命あるものは、命のないものにならな  
っていくのでしょうか。

いいえ、決してそんな事はありません。  
命には、失われるということがないのです。  
美しい葉が枯葉に変わるのも、又おしい  
幸せな時が失なわれて、辛く苦しい日々  
の姿にしかすぎないのです。

みえます。

お釈迦さまは、お経の中で、  
「すべてのものは移り変わり、少しもとど  
まることはない」と無常を説かれました。  
無常を容易に虜で感じとれるこの時期、「  
移り変わり」ということについて、少しお  
話しをしてみましよう。



昨日までの自分は黒髪がフ  
サフサしていたのに、今日の  
自分はしららが頭になってしま  
ったというような、ハッキリ  
した変化はないものの、私達  
は、確かに老いに向かって、  
日々歩を進めているのだとい  
うことを感じることはよくあ  
ります。

若い時は、一晩寝ると疲れも吹き飛んだ  
強じんな身体も、年をとると、医者や薬の  
私が若い頃、家族だけで食事を取ったこ  
とが無い程、私共の寺には入れ替わり、立  
ち替わり、登校拒否児や登社拒否の若者が  
共に居住していました。

他の人が出来る、あたり前のことが自分  
には出来ない。他の人と交わることすら出  
来ず、社会人として失格者だと、初めのう  
ちは落ち込んでいた人達も、学校、会社に  
行かない又いきたくないというその期間も  
彼ら（彼女ら）の  
長い人生からみる  
と、ほんのひとと  
きのことだとわか  
ると、皆元気に立ち直り、本来の立ち位置  
にどの人も、もどっていったものです。



この世の一切の生きものは、たえず移り  
変わりをくり返しながらも少しずつ本当の  
幸せに向って進んでゆくといいことを自覚  
した時、私達の日々のくらし方にも、ゆとり

どこの家庭もみんなそれぞれに幸せそうにみえます。確かに、幸せには違いありません。

良き時代とでもいうのでしうか、文化的な生活のできる今日です。

使いすて時代という言葉も陳腐な言い回しとなる程、私共の衣生活にしても、今はつぎをした古着を着ている人は、ファッションとしては別ですが、余りお目にかかりません。食生活でも、できあいの物が豊富に店頭に並べられる以前はお正月やお盆にしか食べることができなかった物が日頃口に入る現状です。

そして住生活の方も、クリーンヒーター、各種の電化機器と共に、住みやすい快適なくらしが、私共に与えられています。



### 年回の法事

「気にしていたのに、忙しさに取りまぎれて、とうとう法事をしなかった。お寺から知らせてくれたらよかったのに」と、私が住職になりたての頃、檀家さんのお一人から言われたことに端を発し、毎年、一月中旬になると、その年、年回にあたってはいる仏様のあるお宅に通知を出しています。確かに年回法事も、はじめのうちほどの家でも、純粹なまことをささげられますが「去る者は日々に疎し」のたとえ通り、年数が経つにつれて、思い出も追慕の情も次第に薄れて、つい年回法事に気づかずに日が過ぎてしまったということも、あるようです。

年回忌（一般にいう法事のこと）は、一周忌から始まります。二年目は三回忌、次は七回忌、十三回忌というように、数え年の計算で主として三と七のつく年に、年回忌の法要をつとめる慣わしとなっています。

ます。

しかし、生活が文化的になればなる程、心の幸せが薄れていくような気がしているのは私だけでしょうか。同じ一軒の家について、若い人と対話の無いお年寄りがふえたとききます。はなはだしい家庭では、同じ根の下に住んでいて「おはよう」「行つてきます」「おやすみ」といった日常の挨拶さえ、かわされないというのです。

個々でむかいあえば、皆いい人なのです。一般論を話す時には、どの人も物わかりのよい人ばかりなのです。しかし、一担、自分達の日常生活に目を向けると、若い人と年寄りでは別々の生活が理想と思えて、衝突やいさかいが絶えないのです。

お互いに、心の手を差し伸べたいものです。

その後は五十回忌、百回忌と行なうこともありますが、五十回忌ともなると、故人を知っている人も殆んどいなくなっています。そこで三十三回忌を「送り」といって法事のしめくりとすることが多いようです。しかし、考えてみれば、五十回忌などを営むことができるのは、それ程、子孫が繁栄している証しで、むしろめでたいことといえます。

先徳は「亡き人を弔うまことの道は、残れる者の正しき歩みによる」と教えておられます。あたり前のことですが、自分が現在あるのは、御先祖さまがあつてのことです。その御先祖さまの報恩に感謝して営まれるのが、法事という仏事、即ち善行なのです。

在りし日の故人を想い、心しずかに法事を営み、御先祖さまの恩にむくいたいものです。



特別志納者の紹介

○為父（一寸木勲） 供養

金 壹拾萬円

一寸木将都 殿

お気持ちに添うべく、お寺維持の基金と  
させていただきます。  
厚く御礼申し上げます。

一口伝導板

○我を出すな

舌を出すな

精を出せ

○けふほめて あす悪くうふ人の口

泣くも笑うも 人の世の口

○麦蒔けば 麦がなるぞや何事も

人は知らねど 種が正直

う。未だお札をお申し込みでない方は、お電話でも結構です。お一人でも多くの方に御参拝、御焼香、御祈願いただくように、お勧め申し上げます。

○ザル菊鑑賞—報告—

今年日照時間が短かく、雨の日が多かったせいか、ザル菊の開花が思った程の出来映えを発揮できず、お寺の展示会に出展されなかつた人もおりました。それでも、講師でもあり当寺のザル菊会の名誉会長でもある鈴木三郎邸のザル菊園を観た後に、当寺まで足を伸ばして下さる方も年々ふえ、展示期間中はなかなかの賑わいでした。

お天気頼みの所もあるとはいえ、皆で愛情をたっぷりかけて、秋には、また見事なザル菊をおみせしたいと思っております。

○年令

地球は 人間の遊戯場ではない  
人生は 祭日の連続でもない

本気になれ

真剣になれ

人間らしく生きた

時間の合計のみが

人間の年令である

お寺から

○大般若会のおさそい

昨年暮にご案内しましたが、本年は一月八日（成人の日）が、大般若会にあたります。

多勢のお坊様方がお越しになって、お経をおよみ下さいます。

充実した一年を過ごす為の御祈祷日でもあります。静かに、自分の在りようを見つめ直し、新たな決意を仏前に誓願致しませ

平成三十年 年回忌												
2017	2016	2012	2006	2002	1996	1992	1986	1982	1976	1972	1969	1919
一周忌	三回忌	七回忌	十三回忌	十七回忌	二十三回忌	二十七回忌	三十三回忌	三十七回忌	四十三回忌	四十七回忌	五十回忌	百回忌
平成二十九年	平成二十八年	平成二十四年	平成十八年	平成十四年	平成八年	平成四年	昭和六十一年	昭和五十七年	昭和五十一年	昭和四十七年	昭和四十四年	大正八年



1

